

# 小林市立南小学校の学力向上への取組

## 1 学校の概要

本校は、宮崎県や小林市の教育基本方針にのっとり、「健康な身体で豊かな心とすぐれた知性をもち、自己実現のできる児童の育成」を教育の目標とし、その具現化を図るために4つのたい力＝「体力（体）・対力（情）・耐力（意）・台力（知）」を児童に身に付けさせることを目指して日々の実践を行っている。

## 2 児童の実態

本校の児童は、素直で、前向きに学習に取り組む児童が多い。また、保護者も学力向上に対して前向きである。教育に関して、積極的な地区であるといえる。



本校では、平成14～16年度にかけて、学力向上に向けて研究実践を行ってきた。平成14年度は国語科における「伝え合う力」の育成を中心として学力の向上を図る授業の創造を試み、

指導方法の工夫改善、教材・教具の開発などを行ってきた。平成15～16年度にかけて、国語科・算数科の2教科を中心に、個に応じたきめ細かな指導方法の工夫や、少人数指導・一部教科担任制の導入など指導体制の工夫に取り組んできた。また、2年間を通して「読み・書き・計算」の基礎学力を高めるための繰り返し学習の徹底や、家庭学習の習慣化に力を注いできた。これらの取組の成果として、以下のような変容がみられた。

- 児童一人一人の発表機会が増え主体的に学ぶ児童が増えてきた。
- 国語科・算数科の授業を楽しみにしながら意欲的に学習に取り組む児童が増えた。
- 読み・書き・計算などの基礎学力を高める学習活動や家庭学習に積極的に取り組む児童が増えた。

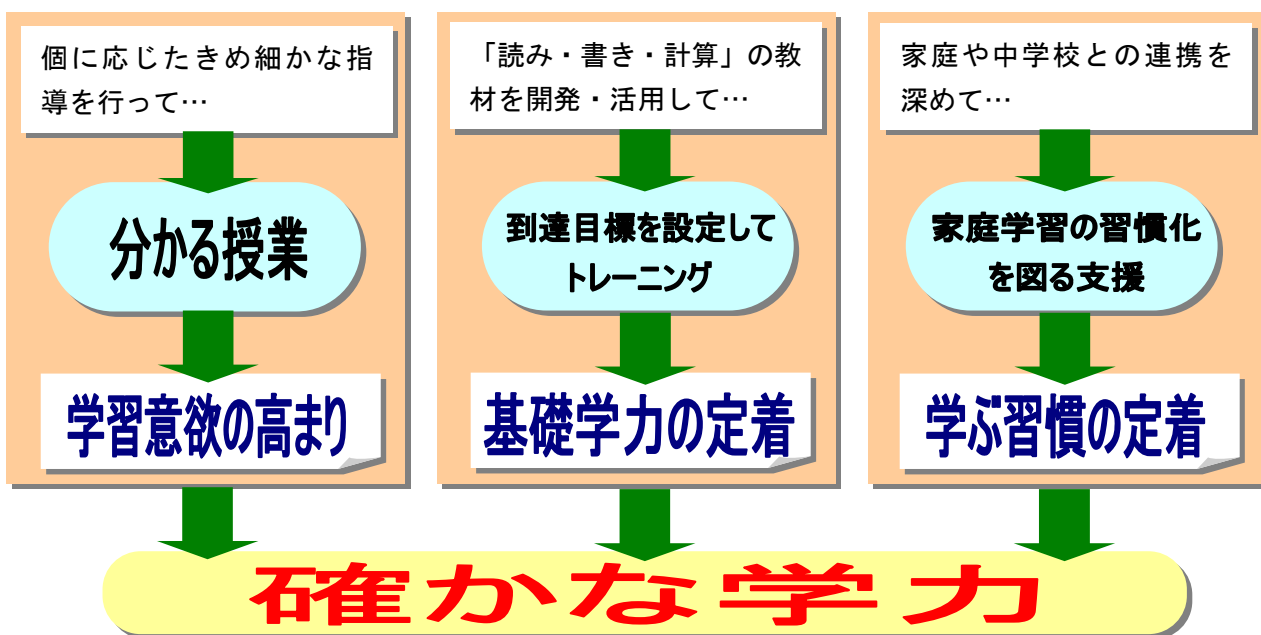
CRT標準学力検査の結果を、全学年の領域別正答率の平均値と比較してみると、国語科では「話すこと・聞くこと」「言語事項」の2領域に伸びが見られた。算数科では4領域すべてにおいて伸びが見られた。特に、「言語事項」「数と計算」領域の伸びが大きいことから、基礎学力向上のために繰り返し学習を徹底してきた成果であるといえる。以上が、本校の児童の実態である。

## 3 学力向上に向けた経営方針

本校では、学力向上に向け、以下のような経営方針で学習指導に当たっている。

- 個に応じたきめ細かな指導をより充実させ、補充的・発展的な学習や学習内容の習熟の程度に応じた指導を積極的に導入し、分かる授業を構築して「確かな学力」の定着を図る。
- 開発した教材の活用を図り基礎学力を更に定着させるとともに、家庭や中学校との連携を深め家庭学習の習慣化を推進することで、児童に自ら学ぶ力を身に付けさせる。

具体的には、下記の図のように、確かな学力の定着を図るための柱を3つ立て、指導を行っている。



#### 4 教育課程内の取組

##### (1) きらきら学習

本校では、「読み・書き・計算」の基礎学力の定着を、次のような場において図っている。

<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 授業中における「きらきら学習」での実践</li> <li>○ 放課後における「習熟の時間」での実践</li> </ul>	基礎学力	内 容
	読み	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ひらがな・カタカナを読む。</li> <li>○ 漢字を読む。</li> <li>○ 文や文章を読む。</li> <li>○ 詩を暗唱する。</li> </ul>
	書き	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ひらがな・カタカナを書く。</li> <li>○ 漢字を書く。</li> <li>○ 文や文章を書く。</li> </ul>
	計算	○ 整数・小数・分数の四則計算

##### ① きらきら学習の実践（国語科）

###### ア 方法

毎時間、1単位時間の導入部分に5分間位置付け、本学習や前時学習との関連を考えながら、児童が自ら進んで学習に取り組めるようにする。

###### イ 内容

読む力を高める	漢字力を高める
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教材文の音読</li> <li>・ 一人読み・グループ読み・全員読み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 漢字の練習</li> <li>・ 漢字を読む・漢字を書く・漢字小テスト</li> </ul>
書く力を高める	その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 文や文章を書く</li> <li>・ 視写・聴写・模写</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 発声練習 ○ 発音練習</li> </ul>

## ② きらきら学習の実践例（算数科）

### ア 方法

毎時間、授業の最初の5分程度を指導計画の中に位置付け、全学年共通の黒板掲示用の【きらきら】カードを提示し、児童の意識を高め、きらきらプリント（開発教材）や、自作プリント、計算ドリルなどを使って繰り返し学習を行う。

### イ 内容

計算力を高める	既習内容を想起させる
<ul style="list-style-type: none"><li>自作プリント（100マス計算など）</li><li>プリントを使っての繰り返し学習</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>プリントを用いての復習</li><li>ノートに書いて取り組む学習</li></ul>

## （2）個に応じたきめ細かな指導を生かす指導体制

指導体制の工夫として、一部教科担任制と算数科における少人数指導を導入している。

指導体制の工夫	教科 及び 学年
一部教科担任制	○ 第3学年以上（教科は、各学年で決定）
少人数指導	○ 第2学年以上での算数科

一部教科担任制については、児童に好意的に受け入れられており、指導の成果が上がっている。また、学年を運営していく上で、生徒指導上の面からもたいへん効果的であるといえる。少人数指導については、以下のことを考慮しながら指導に当たっている。

- 少人数指導者が学級担任と協力しながら指導内容や児童の実態等に応じてグループを編成し、指導形態や指導方法を工夫し、効果的な指導に努める。
- 児童の実態に応じて、補充的な学習や発展的な学習を取り入れるなど、少人数指導を生かした工夫を行い、効果的な指導に努める。
- 学級担任と協力して児童一人一人の学習状況の把握に努め、それらの評価活動を指導に生かすよう、打合せ等の充実に努める。

このような指導を続けた結果、算数科における学力の向上がみられるようになった。

## （3）国語科・算数科における問題解決的な学習

児童が主体的に学習に取り組めるように、本校では、国語科・算数科において問題解決的な学習を展開している。以下に示すような「みつける」「なす」「みがく」の3段階とし、学習の道筋を明確にし、児童がめあて意識や解決の見通しをもって学習に取り組めるようにしている。

また、一人で学ぶ、友達と学ぶ、先生や友達と一緒に学ぶ「でとに学習」を、なす段階やみがく段階に位置付け、問題を自力で解決する力を伸ばすとともに、他者との関わり合いを生かしながら学習内容を深められるようにしている。

## 5 教育課程外の取組

「習熟の時間」とは、毎日放課後の15分間に行う基礎学力定着の時間である。

### （1）内容

学年で習っている漢字の読み・書きや計算の学習が主である。プリントやドリルを使って継続的に実践を行い、基礎学力の確実な定着を目指している。

## (2) 個別指導の時間としての取組

個別に指導を要する児童を各学級からリストアップし、それらの児童への個別指導が充実するように、学級担任以外の職員も動員して全職員で指導に当たっている。

## 6 保護者・家庭、地域との連携

家庭学習のアンケート分析により、児童の家庭学習の時間や内容についての保護者の悩み等が見え、より使いやすい手引きを考えた。中学校の職員と家庭学習時間や家庭学習の仕方について各校での取組状況や児童・生徒の実態について情報を交換し、共通点・相違点を見付けるとともに、小学校から中学校への長期的展望に沿った家庭学習の手引きを作成した。

## 7 成果と課題

### (1) 成果

- 国語科・算数科の特性に応じて学習指導過程を工夫し、学力の実態をもとにきめ細かな指導の手立てをとったことで、児童の学習意欲が高まった。
- 少人数指導や一部教科担任制への取組で、教師が共通理解・共通実践を意識し、一貫した学習訓練や指導の手立てをとったことで、児童に学習の仕方が身に付いた。
- 算数科においては、ワークテストやレディネステスト、CRT標準学力テスト等の具体的なデータを用いて児童の実態分析を行い、個に応じた指導の充実を図ることができた。
- きらきら学習、習熟の時間の時間を設定し、漢字の読み・書きや計算等のトレーニングを徹底してきたことにより、児童の基礎学力が高まった。
- 家庭との連携を図り家庭学習の充実を目指したことにより、児童に家庭学習の習慣が身に付いてきた。
- 中学校と共同の研修会をしたり、参観日の交流を行ったりしたことにより、小中連携の第一歩が始まった。

### (2) 課題

- 国語科・算数科の特性を考慮したうえで、めあてを十分に達成している児童や、努力を要する児童に対する個に応じた指導の手立てをより具体的に図っていく必要がある。
- 少人数指導を充実し、よりきめ細かな指導としていくために、グループ編成の目的や方法についてさらに研究を深めていく必要がある。
- 一部教科担任制については、今年度までの成果と課題を基に、よりよい教科担任制の在り方を研究していく必要がある。
- 校時程を見直し、打合せや情報交換、評価等の時間を生み出したが、放課後にゆとりがないこともあった。今後は、よりゆとりのある時間の使い方を工夫していく。
- 中学校との連携は、今後も共通理解を深める場を増やすとともに、児童・生徒が交流する機会の設定も考えていきたい。また、同一中学校区の小林小学校を交えた連携にも取り組んでいきたい。